

本科 1 期 6 月度

解答

Z会東大進学教室

東大国語



【問題】(演習)

出典：杜甫『杜少陵詩集』卷十／東京大学 99年

書き下し文

百憂の集まる行うた

憶ふ 年十五 心尚ほ孩にして
庭前 八月 梨棗熟すれば
即今 倏忽として 已に五十
強ひて笑語を將つて 主人に供す
門に入れば旧に依りて 四壁空し
痴兒は知らず 父子の礼

健なること 黄犧のごとく 走りて復た来る
一日 樹に上ること 能く千廻なりき
坐臥 只だ多くして 行立少し
悲しみ見る 生涯 百憂の集まるを
老妻 我を睹る 顔色同じ
叫怒して飯を索めて 門東に啼く

現代語訳

数知れぬ嘆きの集まる（ことを詠んだ）詩

思いおこせば、（私が）十五歳のころは心がやはりまだ幼かつたが、
(そのかわり) 黄牛の子のように（しょつちゅう）駆けだしてはまた駆け戻つてきていたほど元気だった。
庭先に、八月になつて梨や棗（の実）が熟すと、

(その実を採ろうと) 一日に千回でも木登りができたものだつた。

(ところが) 今となつては忽ち(年を取つて)もう五十歳になつてしまい、

坐つたり横たわつたりすることが多いばかりで、立つたり歩いたりすることは少ない。

無理に作り笑いをして(現在世話になつてゐるこの家の)主人に話しかけながら、

(自分のこれまでの)人生が数知れない心配事に悩まされるばかりだつたことを、悲しく思い出している。

(借りてゐる我が家)門(から部屋の中)に入ると、(ここに身を寄せる以前と)相も変わらず、周りの壁は(家財道具もなくて)がらんとしているし、

年老いた妻が私を見る、その表情は(私と)同じ(ようく疲れて嘆きに満ちてゐる)。

(ろくに教育も与えてやれないせいでいつまでたつても)馬鹿な子どもは父に対する子としての礼儀もわきまえず、ざやあざやあと食べ物をせがんで台所で泣きわめいているのだ。

解答

(一) 思いおこせば、私が十五歳のころは心がやはりまだ幼かつたが、元気なことといつたら子牛のように駆けだしてはまた駆け戻つてきていた。

(二) 以前からずっと家財道具も持てないほどの貧窮ぶり。

(三) 子どもに食事も教育も満足に与えてやれない自分の不甲斐なさを情けなく思う深い悲しみ。

【問題】(自習)

出典：元稹『元氏長慶集』所収「遣悲懷」三首（連作の詩の）其一／東京大学 98年

書き下し文

謝公の最小偏憐の女

我の衣無きを顧みて 薫篋を捜し

野蔬 膳を充たして長藿を甘しとし

今日 奉錢 十万を過ぐ

黔妻に嫁してより百事乖ふ

他に酒を沽ふを泥りて金釵を抜かしむ

落葉 薪に添へんとして古槐を仰ぐ

君が与に奠を營み復た斎を營む

現代語訳

(晋の) 謝公 (にもたとうべき、実家の父) の末娘として、(その父が) 特にかわいがつた娘 (であるそなた) は、(晋の貧窮の隠者) 黔妻 (にもたとえられる私) に嫁いでからというもの、万事心のままにならない (暮らしであった)。私が着物を持たないことを気にしては、(自分の) 衣装箱 (の中)を探し求めて (その衣類を換金して私の衣服代にあて)、(そのうえ私は) 彼女に酒を買うことをねだつて、金のかんざしを抜かせ (酒代に当てさせ) てしまう。野菜 (ばかり) が食膳を満たして、豆の葉のなれの果て (などといった粗末な食事) をうまいと思い、落葉を薪の不足に補おうとして、(落葉の散るのを待つて) えんじゅの古木を仰ぎ見るのであった。(ところが) 今は、給料が十万以上 (の高額) に達した (私なのに)、そなたのために (できる)ことは)、祀りを行い、また物忌みを (して、参會者に食事をふるまい、そなたを供養) する (ことしかないので)。

解答

- (一) 私、元稹に着物がないのを見ても、亡き妻は自分の衣装箱から換金する衣類をあさり、亡き妻に酒を買うのをねだつて私は金のかんざしを売らせる。

- (二) (ア) 元稹の亡き妻
(イ) 粗食や困窮に耐えて家計をやりくりするための行為。
(ウ) 不平を抱かず夫を内助する、芯の強い静かな心持ち。
- (三) 耐乏生活で作者を助け天逝した妻への感謝と、今は供養しかできないという痛切な哀悼。

解説

(一) まず、作者・元稹は《近体詩》の形式がすでに整った中唐の時代を代表する詩人であり、問題文全体が四聯（八句）からなることから、「律詩」の形式で作られている可能性が高い。他の設問のためにも、先にこのことを確認しておこう。

各聯の末尾の字の韻を確かめると、順に「カイ・サ・カイ・サイ」となり、第二聯の末尾が韻を踏んでいないようにも見えるが、「釵」には「サイ」の音もあるので、《脚韻》の規則については問題ない。（こういうことは、普通は韻を確認したい字の音を表す「つくり」の部分（ここでは「又」）を含む別の漢字を思い出して、その字に確認したい韻があるかどうかを考えるのだが、「又」を含む他の漢字と言つてもあまり思い浮かばないかも知れない。できれば「かんざし」のことを「釵子」ともいうことを知つているとよいのだが、無理に憶えるほどでもない。）そこで、第二聯・第三聯が《対句》になつていることを確認して（後述）、この詩は《近体》の規則に適つた《律詩》であると判断する。（実は、近体詩としての条件はもうひとつ、「平仄」^{ひやくせい}という詩のメロディを守つていることも必要なのだが、これは大学入試レベルでは要求されない知識なので無視してよい。）

さて、先にあつさりとふれた「対句」だが、ここで問題となつていて第三・四句（第二聯）を具体的に確認しよう。そもそも漢詩の七言句は、「二字・二字・三字」または「四字・三字」で意味のまとまりをつくるのが大原則である。これにしたがつて詩の文言を見ると、「顧我」と「泥他」はどちらも「動詞+名詞」で共通、「無衣」と「沾酒」もどちらも「動詞+名詞」で共通（漢文の「無」は「有」の対義語で「持つていらない」意味の「動詞」である）、「搜蠹篋」と「拔金釵」はどちらも「動詞+二字の名詞」でこれも共通、したがつて第二聯は規矩に適つた《対句》である。（「返り点を見ればわかるじゃないか」と言いたい諸君は気を付けたまえ。漢文の対句は返り点で見るのでなく、「実字・虚字の排列」で判断しなければならない。「たまたま返り点が一致するだけでは対句とは言えない」のだし、また「返り点の一致しない対句もある」ということだ。）

そうすると、まず第三句の「我」は、設問に「だれを指すかを明確にして」とあることから「私」と訳するだけでは不十分であるが、かといって作者名を固有名詞で出してしまって、それが作者であることわからなくなる。ここでは「私、元稹」とするしかなかろう。また、第四句の「他」は「我」との対比で用いられていることから「彼」に等しく、ここでは問題文冒頭の説明にある「亡き妻」を言うものと判断できる。設問指示の「それぞれれを指すかを明確にして」には、この考え方で対処する。

次に、第三句全体の主語を確認する。実際には句全体の主語は表現されていないが、「我」が「着物を持たない」のを「顧みて」云々というのだから、主語は「亡き妻」である。ここでは原文の語順を意識することが重要だ。返り点に頼りすぎて「我的衣無きを顧みて……」という和文だけで考えると、うつかり「我」が全体の主語だと勘違いしやすいが、原文には「顧我」とあるので「我」が「顧」の主語でないことは明確である。「亡き妻」を主語として補う必要があるが、そのタイミングは、第三句全体の冒頭に置くと「我」の訳語と重なつて読みにくないので、後半三字の訳のはじめに置くほうがよい。つぎに「搜蓋篋」の部分だが、ここには少々注意が必要である。単純に「衣装箱を捜す」などと訳してしまっては、あたかも「妻は衣装箱を紛失した」と言つてはいることになり、上の四字と意味のつながりがなくなつてしまふ。ここでは「衣装箱（の中の何か）を捜す＝あさる」と考えなければならない。さらに、この「何か」とはもちろん衣類に決まっているが、女物の衣類を見つけてもそれでは夫（＝男）である作者は困つてしまう。「換金・交換」しないと男物にはならないことも理解して答案に盛り込むことだ。

第四句については、「他」が「亡き妻」を言うことに気付きさえすれば、あとは第三句との対応関係を意識することでそう難しくはなくなるはずだ。ただしここでも、第三句と同様に後半の三字の訳には工夫が必要である。主語「私は」を補うのもさることながら、「酒を買うのをねだる」のに単に「かんざしを抜かせ」たところで、まさか「かんざし」を飲んで酔うわけにもいかないだろう。これも第二句と同様に、「換金・交換」を目的とした行為であることの理解を答案に示さなければならぬわけだ。

『対句』とは、同一構文の二句をセットにして、対比と並列を同時にやってみせるテクニックである。対比は共通点を前提とし、並列は相違点を前提とする。対句の解釈には、二句の共通点と相違点を同時に意識するとよい。ここでの共通点は、「もともと名門の家の出身だった妻は、嫁入り道具として高価な装身具を持参していたが、不甲斐ない私のためにそれらを次々と手放してくれた」ということだ。そして相違点は、そのことを第三句では妻自身の立場から述べ、第四句では作者自身の行為として述べているという点である。

最後に、設問の「平易な現代語に」という指示について注意しておく。授業でも再三注意があつたことと思うが、これはなにも「子

どもでもわかるような言葉遣いで」という意味ではない。(そんなことをしていると字数が増える一方である。)漢文の入試問題で「平易な現代語」というのは、「訳文はすべて現代日本語の語彙で書け」というほどの意である。固有名詞は仕方がないが、漢字で書いてあって意味が通じるからといって不用意に原文中の言葉を使ってはならない。

(二) (ア) 第五・六句(第三聯)も《対句》である。(一)で見たように「二字・二字・三字」と対応関係を確認するとよくわかるだろう。その過程で、「野蔬」と「落葉」がどちらも粗末なものであることに注意する。「蔬」は「蔬菜類」の熟語でわかるとおり野菜を言うが、「野」とあるから、市場で売り買いされる栽培されたものではなく、その辺に生えているようなものを何とか料理して食べていることを意味する。「充膳」・「添薪」はどちらも家事に関する表現だから、第三聯の主語はどちらも「妻」である。

なお、夫婦二人で耐乏生活を送っているのは当然だから「作者と妻」と答えたくなろうが、当時の中国では昔の日本と同じく、「男は外で稼ぎ、女は内を守る」のが常識だった。作者は十分に稼いでいなかつたが、これは働きたくてもいい職に就けなかつたらである。このことは、作者が自身を「黔妻」になぞらえていることから読みとれる。【注】を活用しよう。

さらに、「妻」の一字では解答欄の大きさに対してもあまりに簡潔すぎる。「元稹の亡き妻」程度には説明を補つておく。ただし、「亡き元稹の妻」としてはいけない。たしかに「亡き」と「元稹の」は修飾語として並列だが、これでは死んだのが作者になつてしまつ。 (イ) 第三聯は両句とも「具体的な行為」、換言すれば「行為の具体例」を述べているに過ぎない。設問では「簡潔に述べよ」と「説明」が指示されているのだから、現代語訳を書いても無意味である。東大入試でいう「簡潔に」とはほぼ「一般化・抽象化」を暗示するものと考えてよいから、(ア)に見たとおり両句が「家事」に関する表現であることに注目し、設問(一)で確認した「窮乏生活」との関連にも鑑みて、「苦しい家計のやりくり」が前面に出るように説明することが肝要である。

(ウ) 前二問から「妻が苦しい家計をやりくりしていた」ことはわかつた。そこにこめられた「妻」の心情を考えるには、「せつかく良家に生まれたのに貧乏書生に嫁いだばかりに嘗めることになつた辛酸への不満」か「たとえ貧しくはあつても連れ添つた男性と苦楽を共にすることに見いだす喜び」か、二つの方向性のどちらかだらう。ここで考えるのは、その「妻」を当の夫である「作者」がどう見ていたか、ということである。そしてこのような作者の意識は、近体詩においては最終聯に集約的・象徴的に表現されるのがきまりである。そして、次の設問で確認するとおり、作者は妻に対してその死後まで、窮乏時代の「内助の功」に深い感謝と愛情とを抱き続けている。とすれば、妻の心情としても、これに対応する方向性で解釈すべきである。

さて、この方向性で具体的に材料を集めよう。まず、客観的に見ても苦しいはずの生活を、夫を助けながら続けてゆくのだから、「優しさ」だけでなくそれは「強さ」に裏打ちされたものだろう。また、最終聯から考えて、この妻は経済的には報われないまま亡くなつたらしい。自分の運命を受け容れて動じない人生だったのだろうから、「強さ」は「精神の平静・安定」を保つかたちで發揮されたであろうこともわかる。さらに、「優しさ＝夫への愛情」に言及するためには、答案の中には「貧困に対し不平不満は感じない」旨も記したい。これら三点をあわせたものが解答例である。

(三) 設問文中に「感慨」とあることに注意する。これは單なる「感情・心情」などよりもいつそう深く、いろいろな要素が絡み合つた複雑な思いを意味する。『近体詩』では、最終聯に「作者の感慨」が集約的・象徴的にこめられるのが常であるが、これを理解するために最終聯だけを見るのでは不十分で、一首全体に散りばめられた素材を総合的に把握することが不可欠である。

第一聯（首聯）では、作者の亡き妻がもとは良家で大切にされた令嬢だったのに、貧乏な自分に嫁いだために、一転、すべてに苦労することになった事情が述べられる。

第二聯（頸聯）では、夫婦ともに苦しんだというより、むしろなかなか世に出ることができずに煩悶する作者が妻の愛情に甘えてばかりいたらしいことがうかがわれる。

第三聯（頸聯）では、その妻がどんなに苦しくとも夫への信頼と愛情を保ち続けたことが、家事への取り組みを通じて述べられる。そして最終聯（尾聯）には、立派に出世した作者の現状と、その作者が盛大に亡き妻への供養の法事を行っていることが見える。

このように眺めてくると、全体として作者が亡き妻に今も深い愛情を抱いていることはすぐに見て取れるだろう。ただし、その「愛情」を示すのに作者が象徴的に用いたのが「奠・斎」であることに注目すべきだ。これらのことから作者の亡妻に対する「愛情」を捉えなおしてみよう。

まず第七句では、作者の立身榮達が読みとれる。（「俸錢過十万」の「十万錢」の貨幣価値を換算する必要などない。「十万」はそれだけで十分に大きな数字である。）このように立派になれたのも、作者自身が自分を「黔婁」に譬えて恥じないほどに高潔な志を保つたからではあるが、それを支えてくれたのは妻の献身であろう。作者は当然、死ぬまで自分を支え続けてくれた妻に「感謝」しているはずだ。

また第八句では、作者の亡妻を祀る行為が述べられる。若いころに苦勞の限りを経験させてしまつた妻はもうこの世にいない。そ

の靈前に供物を捧げて死者を祀り（＝奠）、また参会者に食事をふるまつて盛大に供養を行い（＝斎）はするものの、それで一首が閉じられることからしても、今の作者にはそれ以外にできることはないのだ。愛する者を喪つて供養しかできないのだから、ここでの作者の心情は「哀悼・追悼」といった表現で理解することができるだろう。

このように、答案は「感謝」および「哀悼」といった二つの柱を中心とすることができる。あとは、一首全体からその「感慨」の具体的な説明に用いることができる材料をまとめて、それぞれの修飾語とすればよい。

【問題】（演習）

出典：河野哲也「意識は実在しない」／東京大学 12年

文章略解

近代科学は、機械論的自然観と原子論的な還元主義をその特徴とする。そこから、眞の自然の姿は没価値的で意味を持たない微粒子の集合であり、それに価値や意味を付与するのは人間の側の主觀の働きであるという二元論的な考え方が生ずる。これは、人間を共同体の地域性や歴史性から遊離した個人として捉える近代特有の人間観と照應する自然観であるが、アイデンティティの基盤を失つた個人が、その個別性を剥奪されてしまうのと同様に、自然を二元論的に捉える近代科学の思想は、それぞれの地域性や歴史性に根ざした生態系の個別性を無視し、自然を単なる搾取の対象とすることによって、決定的な自然破壊をもたらすようになる。

解答

- (一) 実在する自然は没価値的な微粒子の集合体にすぎず、それに見出される意味や価値は人間の主觀によつて生じたものだとする考え方。
- (二) 本来没価値的な自然に価値を与えるのが人間の主觀であるなら、自然の美的価値も人間の精神の所産ということになるから。
- (三) 機械論的で還元主義的な近代科学の自然観は、現実の自然の個別性を剥奪し、単に分解して利用する対象としか捉えないから。
- (四) 個別性の基盤となる共同体の歴史性や地域性を無視した人間観によつて、画一化された人間認識が要請されてしまうこと。

(五) 人間の個性を捨象し規格化して捉える近代の人間観と対応する、機械論的で還元主義的な近代科学の自然観は、それぞれの歴史性や地域性を基盤に形成され、独自の価値を有する生態系を単なる利用の対象として、決定的な自然破壊の要因となつたといふこと。

(六) a 潶渴（枯渇） b 効率 c 秩序 d 浸透（滲透） e 交換

〔120字〕

【問題】(自習)

出典：野家啓一『科学の解釈学』（V 科学という物語）／オリジナル問題

文章略解

新参の「知」である「科学」が、「神学」や「哲学」に匹敵する権威を身につけるには、科学研究の本質をベースとしつつ、それを喧伝する「物語」が必要であった。「物語」によって「科学」が自己を聖別するプロセスは、政治権力による正当化のプロセスと同種のものである。科学は、自らが生み出した技術的成果だけではなく、それを生活世界に浸透させているハード・ソフト両面の社会的回路によって自らの正統性を証明している。

解答

(一) 科学が自己の正統化のために、自身と類似する知の体系を差別し、他に対する以上に激しく攻撃しようとする意識のこと。

(二) 科学が、社会的正統性を得るために、科学史や科学哲学という学問を必要としていたという点を、筆者は重視しているから。

(三) 科学技術という可視的制度を成立させ、その構造上の安定性を確保するために必要不可欠なイデオロギー的基盤。

(四) 科学は旧来の知の体系より遅れて発生したため、科学自身を権威づける装置を必要とした。しかしながらそれは科学自身の成果のみでは不十分であり、科学の本質を人々により強く訴えかけるために科学史や科学哲学といった学間に頼らざるを得ないから。

- (五)
- a ≡ 峻別
 - b ≡ 喧伝
 - c ≡ 聖別
 - d ≡ 中葉

〔115字〕

(一) 「近親憎悪」については、問題文中では「かつて自らがそうであったもの、そして自己と『似ていて非なるもの』に対しても、ことわら厳しく差別意識を行使しようとする」(27~28行目)と説明されている。

設問では「どういう意味か」「具体的に説明せよ」と要求されているから、単なる傍線部の指示内容の説明だけでは不十分である。科学が、どのような対象に「近親憎悪」の感情を抱いたのかに加えて、「なぜ」そうした感情を抱く必要があったのかについても、問題文全体の論理展開をふまえて説明する必要がある。

「近親憎悪」の対象については、傍線部の直前にあるように、「占星術、鍊金術、心霊術」であり、科学にとって「似ていて非なるもの」(27~28行目)に他ならない。

次に、こうした対象に対してなぜ科学が近親憎悪の感情を抱く必要があったのかについての筆者の論理を確認しよう。そのためには、傍線部の前までに説明されている、科学の成立の歴史的経緯についての筆者の説明を把握する必要がある。

第五段落目で述べられているように、科学の語源である「scientia」は、一般的な「知」あるいは「知識」の意味しか持たず、特定の対象と方法によって特徴付けられる今日的な意味での「科学」を指す言葉ではなかった。23行目にあるように、「科学」が今日的な意味で用いられるようになったのは「十九世紀に入ってから」であり、歴史的には「科学」は「〈知〉の新参者」であった。したがって、「〈知〉の新参者」として登場した科学は、旧来の〈知〉に対して、自己を峻別し、差異を際立たせ、さらに、「自己」のアイデンティティを確立しつつその『正統性 (legitimacy)』を誇示しようとする」(26~27行目)必要に迫られていたのである。以上から、科学が、「自己」を差別化し、正統化する必要に迫られていたため、「自己」と類似する学問」に対して、ことさらに激しい差別意識を抱いていたとする説明をする。

(二) まずは何を「忘れるべきではない」のか、その指示内容から確認する。これは傍線部直前で述べられている、ヒュー・エルが『帰納的科学の歴史』『帰納的科学の哲学』といった科学史を著述しただけではなく、社会的身分としての『科学者 (scientist)』という呼称の造語者であったことを指している。この事実が含意することについては、傍線部の直後で、「科学的〈知〉を職業的に担う階層の出現と、科学史および科学哲学の成立とは、ほとんど時を同じくしていた」と説明されている。

設問では、「なぜ」この点を筆者が重視しているのかについての説明が求められている。今日的な科学の成立と、科学史や科学哲

学の成立がほぼ同時期であったことが重要であると筆者が考へているその理由について説明しなければならない。

(一)で確認したように、「〈知〉の新参者」として登場した科学は、自己を正統化する必要に迫られていた。第七段落では、「科学」が正統性を獲得するプロセスが、「政治権力の正統化のそれと、ほとんど選ぶところはなかつた」(35～36行目)と述べられている。この段落では、政治権力の正統性獲得のためのプロセスと、科学という新しい知が正統性を獲得するためのプロセスとが同じメカニズムであると説明されているのだ。

筆者によれば、大和朝廷はその正統性を獲得するためには、『古事記』や『日本書紀』といった歴史書を必要としていた。これは新しい王権がその正統性を確立するために、歴史という学問を積極的に利用した、ということである。これと同じ関係が、科学と科学史や科学哲学といった、科学を対象とする学問と科学の間においても成り立つのだ、というのが筆者の主張である。科学もまた「自己の来歴を飾り立てる科学史家」「大義名分を明らかにする科学哲学者」(37～38行目)を必要としていたのである。

つまり、科学の成立と科学史や科学哲学の登場が同時期であったのは単なる偶然ではなく、科学という新しい知の正統化のために、科学史や科学哲学という新しい学問が必然的に登場したという点に、筆者は注意を喚起しているのである。

(三) (二)で確認した通り、第七段落までに筆者は、科学史や科学哲学といった学問が、科学という新しい知が正統性を獲得するための「物語」を再生産することに手を貸してきたと述べている(44行目)。傍線部を含む第八段落では、こうした「いかがわしい『物語』」など必要としなくとも、科学はその技術的成果によってその正統性を証明できるのではないか、という反論を想定しつつ議論を開いている。

このような反論に対し、科学の影響力の源泉が技術そのものではなく、「技術を生活世界に浸透させていく社会的回路」にあると述べているのが傍線部である。

この点については、次の第九段落で説明がなされている。第九段落では「科学の制度化」について、ハードウェアとしての「可視的制度」と、ソフトウェアとしての「不可視の制度」に分けて説明し、可視的制度は不可視の制度によって、〈補完〉されることによってのみ「可視性」を保持していると述べている。

傍線部の「社会的回路」が、このうちの「不可視の制度」に対応していることがつかめれば、「社会的回路」の内容については「不可視の制度」の内容を説明すればよいことが分かる。「不可視の制度」については、57行目で、「『可視的制度』の再生産を促し、そ

の構造的安定性を保持しているイデオロギー的基盤」と説明されている。

答案では、「可視的制度」（＝科学技術をとりまく具体的な制度）と「不可視の制度」との関係をまずおさえたうえで、「社会的回路」＝「不可視の制度」の内容について説明する。

(四) (一)～(三)までの設問をふまえ、本文全体の論旨をまとめることが要求されている。

傍線部を読点をはさむ前半部分と後半部分とに分けて、それぞれの内容を説明するとよい。

前半の「『科学』そのものが本来的にこの種の『物語』を必要としている」という点については、(二)で確認したように、科学が知識の体系の新参者として登場したため、成立期において科学史や科学哲学が生み出す「物語」によって自己を正統化する必要に迫られていたことを説明する。

後半の「今なお要求し続けている」という点については、今日においても、科学の正統性は技術的影響力によつてのみ成り立つものではなく、それを受け入れさせるためのイデオロギー的基盤を必要としているという、(三)で確認した内容を盛りこむ。

【問題】(演習)

出典・桑子敏雄『風景のなかの環境哲学』／東京大学 11年

文章略解

河川は過去から未来へと流れてゆく人生の暗喩である。河川の空間は、自然の営みと、そこを訪れる多くの人びとの経験の蓄積によって造りあげられた空間の履歴を、自らの身体をもつて感得し、新たな経験や発想を産む創造性に富んだ場所である。したがって固定化された概念によつてその空間が再編されてしまうと、その概念によつて河川空間での経験が限定され、創造性が失われてしまう。

解答

- (一) 河川のほとりを歩きながら、自らの身体を通じて自然と人為による多層化された風景とその意味を知覚すること。
- (二) 河川空間が本来持つていた多様な身体的経験の可能性が、特定の概念にもとづく空間の再編によつて限定されてしまうこと。
- (三) 河川空間の意味や個性は、河川工事竣工後の自然の営みと、そこを訪れる人びとの関わりによつて徐々に形成されてゆくものだから。
- (四) 時が経つにつれ、河川の空間には自然の営みと人びとの経験とが蓄積され、次第に豊かな意味が醸成されてゆくということ。
- (五) 風景とは、固定化された概念によつて制御された空間とは異なり、人がそこで自己の身体と経験を介してその風景が長期間にわ

たつて蓄積してきた自然や人間の営みの持つ意味を感得し、自己を刷新する固有の経験を得られる創造性に富んだ場であるといふ」と。〔118字〕

(六)

a
|| 跳
(ねる)

b
|| 断片

c
|| 抑压

d
|| 阻害
(阻碍)

【問題】(自習)

出典：高橋裕『都市と水』／東京大学 89年・改題

文章略解

自然の循環生態系によく合った土地利用としての水田では、農業用水路は農民の生活全般に対して、今日的に言えば「多目的」な機能を果たしていた。しかし、近代の生産性と効率を追求する都市計画のために、近代的な水路は住民の生活から意図的に切り離されてきている。のみならず、このように一つの目的達成のみを追求することは、水路と住民を含む自然の循環生態系を破壊し、地域社会を崩壊させる危険性すら持つのである。

解答

- (一) 水路を中心とした農民の生活全般が営まれ、完結していたから。
- (二) 効率性のみが追求されるあまり、地域住民の生活から断ち切られる形で近代的水路が管理・運営されること。
- (三) 住民の生活全般を含めて循環生態系の調和を保とうとすること。
- (四) いたずら効率のみを徒に重視する近代文明は、人間と自然とのつながりを犠牲にして成立してきたのではないか。こうした批判に基づき、昔の農業用水路が単に農業効率のみならず、人間の生活とのつながりをも含めた広い働きを持つていたことを訴えようとしているから。〔119字〕

- (五)
a ≡ 頑丈
b ≡ 散策
c ≡ 警鐘

(一) 理由説明の問題であるから、基本的には傍線部分に至る内容をまとめれば解答が導ける。ここでは、傍線部分の直前に「だからこそ」、さらに前行にも「したがって」という因果関係を示す語句があるので、手がかりは簡単に得られる。要するに「農村の農業用水路は……その管理も行き届いていたのである」(7~9行目)の内容を、一行の解答欄に入るようまとめればいいだけのことだ。農業用水以外に「飲料や家事用水に、さらに防火用水にも利用していた」ということは、ひとことで括れば「生活全般」ということになろう。こうした内容をまとめることがまず第一条件。

では、その「農業用水路」の「管理も行き届いていた」→「一幅の絵画」という叙述の流れをどう整理するか。ここでは筆者が「一幅の絵画」という表現を用いていることの意味を充分に吟味する必要がある。「絵画」一般ではなく「一幅の」とわざわざ記しているところから推せば、ここで筆者は「完結した・まとまりのある」風景であることを示したいものと思われる。こうした性質の指摘もほしい。これは17行目の「水路を要とする田園風景」という表現にもつながってくる。

以上二点がこの解答のポイント。

(二) 直前にある「こうして」の指示内容を押さえることがまず必要な作業になつてくる。直前の部分では、子供の危険を防止するための水路の管理について述べられているが、この傍線部分の叙述は子供だけに限られたものではなく「周辺の住民」「地域の人々」についてのものである。このことは、傍線部分の直後の、「農業用水路は、大人にとつても……憩いの場であつた」(33行目)の記述でもわかる。だとすると、この「子供」をめぐつての「管理」云々は(一)でも検討してきたような「効率重視」の動きの一例として捉えるべきであろう。まずはこの点を押さえることだ。そうすれば、設問の指示にある「積極的に隔離される」という表現の意味にもつながつてくるはずである。「効率重視」の立場に立てば、人々の存在は無駄なものとして、意図的に排除されるということだ。こうしたニュアンスも解答には織り込ませたい。

これに加えて、ここでは、「地域」という語に筆者がこめた思いをくみ取りたい。「地域」という語がこの文章で最初に登場するのは26行目である(ここではカギカッコつき)。ここには「農民が自然との付き合いの路として育ててきた」とあり、農民の生活とのナマの関係が示されている。これは34~35行目の「水や土、そしてそれらにより成る『地域』との親しみ」という表現にもつながる。したがつて解答に際しては、こうした「地域」=人々の生活とのつながり、というポイントもほしいところだ。

以上二点が含まれた解答ならOK。

(三) 傍線部分の「その亂れ」とは、直前の「循環生態系は乱れる恐れがある」の部分を指している。このことから考えれば、設問で問われている「系全体」の「系」＝「循環生態系」であることは一目瞭然。

では、その「系」の「全体の平衡を考慮する」とはどういうことか。これについては、筆者が「全体」という言葉でどれくらいの広がりをイメージしているのかを見きわめることができポイントになる。37行目の「農民を主体とする地域住民もその系に組み込まれていたと考えられる」の部分を手がかりにしたい。筆者のモチーフは徹頭徹尾「地域」の住民の生活に根ざす形での水路の構築、とうることにある。だから、単に「循環生態系」というだけではなく、地域住民の生活全般も視野に収めてバランスを考えていくべきだ……と主張しているのである。

この点がくみ取れている解答ならばOK。

(四) 評論の文章の中でカギカッコが用いられる場合、独自の意味を持たせようとする筆者の意図がそこに働いている場合が多い。したがって、この種の設問に対しても、何故に筆者がこのような表現をしたのか、という意図を具体的に指摘することが作業課題となる。ここでは、この傍線部分を含む文が「しかし」で始まり、「流速の早い近代的水路」が「効率が良い」としていることへの批判・反論であることをまず押さえたい（①）。筆者の意図の基本には、「近代的」＝「効率が良い」ということに対する批判意識があるのだ。では、「多目的機能」とカギカッコをつけることで筆者は何を言おうとしたのか。傍線部分に続く記述の中で「発電用水の鉄管路や水道管ならそれでよい」（25行目）とあり、それらと比較して「農業用水」とは異なることが述べられている。そこでは「農民が自然との付き合いの路として育ててきた」（26行目）・「子供たちは……自然との付き合いの方を自然に覚える」（27行目）などの記述から推せば、ここで筆者が強調したいのは、農業用水路には単に「効率」だけではなく、人々の「自然との付き合い」があるということであろう（②）。

以上①②の含まれた解答ならばOK。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--